

就業自己イメージと専門選択の動機に関する研究 — 保育者養成校における比較 —

樟本 千里, 小河 晶子, 岡田 恵子
伊藤 智里

A Study on the Self-Image after Attaining an Occupation and the Motive of Occupation Career Selection

— A Comparison of Department of Nursing Childcare with Department of Childcare —

Chisato KUSUMOTO, Akiko OGAWA, Keiko OKADA
and Chisato ITO

キーワード：職業意識, 就業自己イメージ, 専門選択, 医療保育, 保育

概 要

本研究は医療保育科の学生(医療保育科生)と他の保育者養成校の学生(保育科生)との比較を通して, 本学医療保育科の学生の実態を明らかにすることを目的とした。医療保育科の学生は, 専門選択を行う際にあらゆる視点が判断材料として強い影響力をもっていることが示された。また, 就業自己イメージは, 独自性, 自己高揚性, 支配性, 融和性の4つの因子において, 保育科学生よりも強くイメージしていた。さらに, 就業自己イメージと専門選択動機の関連性については, 自己高揚性の因子は自己実現への達成動機と情報の取入れに影響を受けていた。また, 支配性の因子は情報の取入れのみに影響を受けていることが示された。したがって, 医療保育科の学生は, 保育者養成校の中で特徴的なニーズを持つ学生が集まっていると考えられ, そのニーズに応じた教育を提供する必要性があることが示唆された。

1. 緒 言

保育者が要求される専門性は年々拡大傾向にある。幼児期の子ども生活の援助や発達の援助というだけでなく, 地域の子育てセンターとしての育児支援の役割や親教育の役割, 統合保育が進む中で健常の子どもだけではなく発達障害を中心とした障害のある子どもへの援助もまた求められてきている。さらに, 通常の保育機関では病気の子どもを預かることはできないが, 女性の社会進出を背景に病児もしくは病後児を預ける場所の必要性が生まれてきており, このような社会的な流れを受けて本学の医療保育科は発足した。

保育者養成校の数は多く, 本学所在の岡山県では18校で保育者の養成が行われている。それぞれの養成校にはそれぞれの特色があるだろうが, 本学の医療保育

科は医療の専門的知識を持つ保育者の養成を特色として掲げている。本学が他の保育者養成校と比較して, 特色ある保育者養成ができたかについては一期生の卒業を待たねばならない。

ところで, 近年大学新卒者の早期離職率が高く社会問題となっている。3年以内の離職率は1996年の大学卒業生で約3割となり, その理由で最も多いのが「仕事が自分に合わない」であった¹⁾。早期離職の原因としては選職時の甘さ, すなわち大学生が進路選択時に自分の志望する道を選べていない, もしくは生涯においていかに職業的な自己実現をするかということあまり考えていない点が指摘されている²⁾。特に短期大学では職業教育の色合いが強くと求められており, 自分の職業的な目標が明確になっているか, 実現できそうか, 能力は十分あるかという職業に関するイメージが重要になってくると考えられる。

筆者たちは, 医療保育科の特徴を見出すために, 本学において同じ対人援助を専門とする職業である看護師を養成する第一看護科と介護福祉士を養成する介護福

(平成18年9月28日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

社科を比較の対象とし、学生の職業意識と専門選択の動機について検討した。その結果、医療保育科生は、第一看護科や介護福祉科に比べると職業意識が高く、特に自己実現の達成動機と、より多くの情報を取り入れて専門選択を行った学生ほどその傾向が高まることが明らかになった³⁾。しかしながら、医療保育科の基盤となる専門性は保育であることを考えれば、その中で独自性が見出されるか否かがより重要になるだろう。上述したように、保育者の専門性が年々拡大していること、また、数多くある保育者養成校の中から、医療保育科を目指して入学してきた学生がいることを考えれば、保育者養成の中での独自性を見出し、それをふまえた専門教育ができることが望ましい。したがって、本研究では他の保育者養成校を比較の対象とする。

筆者らが行った先行の研究³⁾では職業意識の測定にHRMチェックリスト⁴⁾の中から、キャリア・コミットメント (career commitment: CC) の尺度を用いた。このチェックリストは「企業の雇用管理の改善を通じて雇用の安定と企業経営の発展をはかる」という課題のもとで、組織の生産性を高め、より良い仕事・職場を実現し問題を明確化するための尺度として開発されたものである⁵⁾。この中のキャリア・コミットメント (career commitment: CC) は自分の専門分野や職業キャリアに対する関心や思い入れの強さを測定するものである⁵⁾。しかしながら、就職への準備期間にある短期大学生にとっては、自己の目標が実現できそうかという職業に関するイメージの方が重要であると思われる。そこで、清水ら⁶⁾が作成した就業自己イメージを用いることとした。就業自己イメージとは、“就業後に自己が置かれる状況や、周囲からどのような影響を受けるかに関する、職業の種類という枠を超えた見通し”と定義されている⁶⁾。このことから、就職前の学生にとって答えやすい内容であると言えよう。

本研究は、本学の医療保育科生の就業自己イメージと専門選択の動機との関連性について検討するものである。その際、他の保育者養成校に所属する学生（以下、保育科生と記す）を比較の対象とすることで、保育を専門とする中での医療保育科生の特性を見出すことを目的とする。

2. 方 法

1) 調査対象

本学の医療保育科及び同じ中国地方にある、A短期大学保育学科、B短期大学部保育学科、C短期大学幼児

教育保育学科1年生女子に調査を行った。分析対象者数は本学医療保育科68名、A短大91名、B短大65名、C短大102名であった。なお、いずれの養成校においても保育実習前に調査を行った。

各調査対象校については、本学は保育養成を始めて2年目であるが、その他の養成校はA短大が42年目、B短大が41年目、C短大が35年目といずれも保育者養成における長い歴史を有している。また、本学のみが3年制のカリキュラムであり、他の三校は2年制のカリキュラムであるという違いがある。したがって、本学以外の養成校の類似性は高く、学校差は小さいと考えられる。そこで本学医療保育科以外の3つの養成校をあわせ、以下保育科と称す。

2) 調査時期および手続き

2006年6月～7月。各養成校とも、授業時間の一部を使い、担当の教師により一斉に実施した。所要時間は15分から30分であった。

3) 調査内容

1. 希望進路：養成校を卒業した後、どのような進路に進みたいと希望しているかについて尋ねた。①保育所、②幼稚園、③施設、④編入、⑤進学、⑥その他の6つの選択肢の中からひとつを選択させた。
2. 専門選択動機尺度：3因子構造（「自己実現」「情報」「家族・親戚」）からなる専門選択動機尺度を用いた³⁾。19項目から作成されており、各項目に対して5件法で回答を求めた。
3. 就業自己イメージ尺度：就業後に自己が置かれる状況や、周囲からどのような影響を受けるかに関する職業の種類という枠を超えた見通しを調べる尺度として、清水ら⁶⁾により作成された7つの因子（「独自」「競争」「自閉」「自己高揚」「拘束」「支配」「融和」）からなる就業自己イメージ尺度を用いた。この尺度は65項目により構成されており、各項目に対して7件法で回答を求めた。
4. 分析：集計・分析にはExcel 2002及びSTATISTICA '98 Editionを用いた。

3. 結 果

1) 調査対象者の希望進路について

調査対象者の希望進路については表1に示す通りである。なお、欠損と複数回答を行った者については分析対象から除外した。したがって、医療保育科生が65名、保育科生が224名での分析となった。希望進路に

表1 各進路希望の人数とその割合

		保育所	幼稚園	施設	編入	進学	その他
医療保育科生	人数	29	9	10	4	0	13
	(%)	44.6	13.9	15.4	6.2	0.0	20.0
保育科生	人数	156	30	15	4	6	13
	(%)	69.6	13.4	6.7	1.79	2.7	5.8

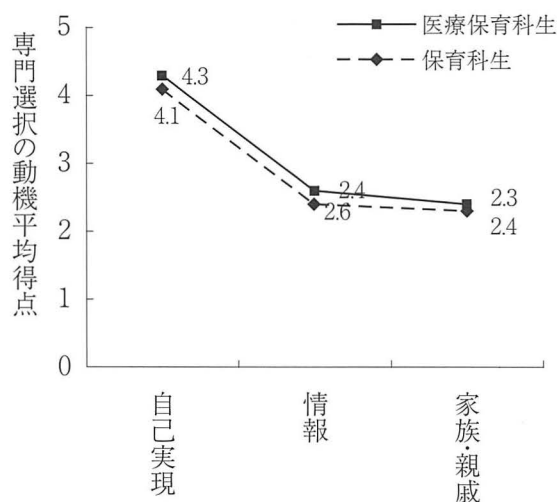


図1 医療保育科生および保育科生の専門選択の動機平均得点

について医療保育科生と保育科生における特徴を検討するために χ^2 検定を行った結果、人数に偏りが見られた($\chi^2(4)=20.92, p<0.01$) (注: 医療保育科において進学の度数が0であったため、編入と進学を合わせ、分析は 2×5 の要因計画で行った)。残差分析の結果、保育所就職希望者は、医療保育科生で44.6%、保育科生で70.0%であり、医療保育科生は保育科生に比べると保育所への就職希望者の割合が低い($p<0.01$)。幼稚園への就職希望者は医療保育科生が14.0%、保育科生が13.4%であり統計的な違いは見られない。施設への就職希望者は、医療保育科生が15.4%、保育科生が6.7%であり、医療保育科生は保育科生に比べると施設への就職希望者の割合が高かった($p<0.05$)。編入と進学を合わせてみると医療保育科生が6.2%に対して、保育科生は4.5%であり偏りは見られなかった。その他については、医療保育科生が20%に対して、保育科生が5.8%であり医療保育科生は保育科生に比べて選択者が多かった($p<0.01$)。その他の内訳をみると、医療保育科生では、病院9名、院内保育2名、小児(病棟)2名であるのに対し、保育科生では、病院、介護福祉専攻科、テーマパーク、司書、企業が各

1名、未定3名、空白5名となっていた。医療保育科生のその他がすべて医療機関に関連しているのに比べて、保育科生では様々な方向への就職希望となっていた。

2) 専門選択の動機について

調査対象者は1年生であり、全員が何らかの動機を持って、保育者養成校へ入学したものと考えられる。そこで、専門選択動機尺度の各項目について、「非常に当てはまる」を5点、「全く当てはまらない」を1点として得点化し、3つの下位尺度得点「自己実現得点」「情報得点」「家族・親戚得点」を算出した。図1は、医療保育科生、保育科生それぞれの専門選択の動機の平均得点を示したものである。

科の特性(医療保育科、保育科の2水準)×専門選択の動機(自己実現、情報、家族・親戚の3水準)の2要因の分散分析を行った。科の特性は被験者間要因、専門選択の動機は被験者内要因の混合計画である。その結果、科の特性の主効果($F(1,324)=5.46, p<0.05$)がみられ、医療保育科は保育科に比べて専門選択の動機が高いという結果が示された。すなわち、医療保育科生にとって、専門選択を行う際にあらゆる視点が判断材料として強い影響力があったといえよう。また専門選択の因子の主効果($F(1,648)=430.19, p<0.00$)がみられたので、LSD法による多重比較を行った結果、自己実現>情報>家族・親戚(すべて $p<0.01$)となった。なお、交互作用は見られなかった。

さらに、医療保育科と保育科別に専門選択の動機に関する3因子の関連性について検討した。それぞれの相関係数を表2に示す。その結果、医療保育科生では自己実現因子と情報因子の間に弱い相関が見られたが、保育科生ではほとんど相関がなかった。一方、医療保育科生では情報因子と家族・親戚因子にほとんど相関がないのに対して、保育科生では中程度の相関が見ら

表2 専門選択の動機における下位尺度間の相関関係

	自己実現	情報	家族・親戚
自己実現		0.30	-0.11
情報			*
家族・親戚	0.12	0.17	
		*	
	0.00	0.42	
		**	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$
右上: 医療保育科生, 左下: 保育科生

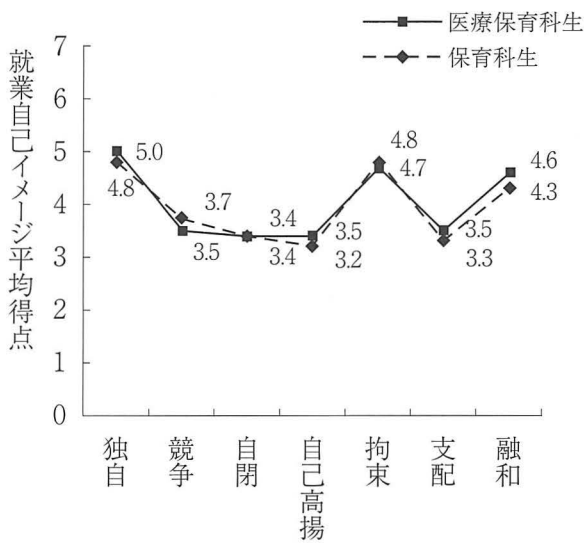


図2 医療保育科生および保育科生の就業自己イメージ平均得点

れた。したがって、医療保育科と保育科では専門選択の動機の3因子の関連性が異なることが示唆された。

3) 就業自己イメージについて

就業自己イメージ尺度の各項目について、「きわめて思わない」を1点、「きわめて思う」を7点として得点化し、清水ら⁵⁾に従って、7つの下位尺度得点、すなわち、「独自性得点」、「競争性得点」、「自閉性得点」、「自己高揚性得点」、「拘束性得点」、「支配性得点」、「融和性得点」を算出した。図2は医療保育科生、保育科生それぞれの就業自己イメージの平均得点を示したものである。

科の特性(医療保育科、保育科の2水準)×就業自己イメージ(独自性、競争性、自閉性、自己高揚性、拘束性、支配性、融和性の7水準)の2要因の分散分析を行った。科の特性は被験者間要因、就業自己イメージは被験者内要因の混合計画である。その結果、科の特性と就業自己イメージの交互作用が得られた($F(6,1994)=5.8, p<0.00$)。LSD法を用いた多重比較の結果、独自性、自己高揚性、支配性、融和性において、医療保育科生の方が保育科生に比べて就業自己イメージが高いことが示された(すべて $p<0.01$)。また競争性においては保育科生の方が医療保育科生に比べて就業自己イメージが高いことが示された($p<0.01$)。自閉性および拘束性では差異は見られなかった。次に、医療保育科生の就業自己イメージを見てみると、独自性>拘束性=融和性>競争性=自己高揚性=支配性=自閉性となるのに対し、保育科生では独自性=拘束性>融和性>競争性>自閉性=支配性>自己

高揚性となった。

さらに、医療保育科と保育科別に就業自己イメージに関する7因子の関連性について検討した。それぞれの相関係数を表3に示す。その結果、保育科生では、独自性と競争性、競争性と融和性、拘束性と支配性、拘束性と融和性の4つに関しては相関関係がみられた。しかし、医療保育科生ではこれら4つに関しては相関関係が示されなかった。医療保育科生、保育科生ともに相関関係が見られなかったのは拘束性と自閉性、拘束性と自己高揚性の2つであった。

4) 就業自己イメージに及ぼす専門選択の動機の影響

就業自己イメージに対する専門選択の動機の3因子における直接的な影響力を比較検討するために、就業自己イメージの7つの下位尺度得点を目的変数とし、専門選択の動機の3因子の得点を説明変数として重回帰分析を行った。表4はその結果を示したものである。

① 独自性

医療保育科生では、自己実現得点に正の影響力($r=0.49, p<0.01$)がみられ、やや高い説明率($R^2=0.283$)が得られた。また、情報得点及び家族・親戚得点の影響は見られなかった。同様に保育科生でも、自己実現得点に正の影響力($r=0.43, p<0.01$)がみられ、ある程度の説明率($R^2=0.185$)が得られた。また、情報得点及び家族・親戚得点の影響は見られなかった。

② 競争性

医療保育科生では、3変数の標準回帰係数はすべて有意ではなかった。保育科生では情報が弱い正の影響力($r=0.19, p<0.05$)を示したが、説明率が低いことを考慮すると($R^2=0.039$)この影響力はごく小さいものであると言える。

③ 自閉性

医療保育科生、保育科生ともに3変数の標準回帰係数はすべて有意ではなかった。

④ 自己高揚性

医療保育科生では自己実現得点と情報得点が正の影響力(それぞれ $r=0.24, p<0.05$; $r=0.40, p<0.01$)をもつことが明らかになり、やや高い説明率が得られた($R^2=0.274$)。家族得点の影響は得られなかった。一方、保育科生では情報得点が弱い正の影響力($r=0.14, p<0.05$)を示したが、説明率が低いことを考慮すると($R^2=0.047$)この影響力はごく小さいものであると言える。

表3 就業自己イメージ尺度における下位尺度間の相関関係

	独自	競争	自閉	自己高揚	拘束	支配	融和
独自		0.15	0.25	0.51	0.34	0.35	0.34
			*	**	**	**	**
競争	0.22		0.51	0.31	0.22	0.46	0.16
	**		**	*		**	
自閉	0.31	0.41		0.56	0.00	0.62	0.49
	**	**		**		**	**
自己高揚	0.50	0.50	0.37		0.17	0.68	0.56
	**	**	**			**	**
拘束	0.38	0.25	0.01	0.19		0.18	0.16
	**	**		**			
支配	0.49	0.55	0.40	0.70	0.20		0.58
	**	**	**	**	**		**
融和	0.59	0.26	0.50	0.48	0.24	0.45	
	**	**	**	**	**	**	

*<0.05, **<0.01

右上：医療保育科生，左下：保育科生

表4 就業自己イメージを目的変数とする重回帰分析

	独自	競争	自閉	自己高揚	拘束	支配	融和
医療保育科生							
自己実現	0.49 **	0.02	0.11	0.24 *	0-.01	0.07	0.18
情報	0.01	0.17	0.15	0.40 **	0.08	0.36 **	0.16
家族	-0.14	0.09	0.03	0.03	-0.20	0.02	-0.11
	0.283 **	0.043	0.044	0.274 **	0.046	0.151 *	0.087
保育科生							
自己実現	0.43 **	-0.06	0.06	0.10	0.09	0.12	0.21 **
情報	-0.05	0.19 *	0.04	0.14 *	0.07	0.06	0.03
家族	0.09	-0.02	-0.01	0.07	0.04	0.03	-0.01
	0.185 **	0.039 *	0.006	0.047 **	0.019	0.023	0.049 **

*<0.05, **<0.01

⑤ 拘束性

医療保育科生，保育科生ともに3変数の標準回帰係数はすべて有意ではなかった。

⑥ 支配性

医療保育科生では情報得点が正の影響力($r=0.36$, $p<0.01$)がみられ，ある程度の説明率($R^2=0.151$)が得られた。他の2変数の影響力は見られなかった。一方保育科生では3変数の標準回帰係数はすべて有意ではなかった。

⑦ 融和性

医療保育科生では，3変数の標準回帰係数はすべて有意ではなかった。保育科生では自己実現得点が正の影響力($r=0.21$, $p<0.01$)を示したが，説明率が低

いことを考慮すると($R^2=0.049$)この影響力はいくつも小さいものであると言える。

4. 考 察

本研究の目的は，保育を専門職としようとする保育学生の中において，医療保育科に入学した学生の特徴を，専門選択の動機と就業自己イメージから明らかにしようとするものであった。その結果，以下の4点が示された。(1)医療保育科生は他の保育科生よりも児童福祉施設への就職を希望する人が多く，さらに医療現場への就職を視野に入れている。(2)医療保育科生にとって，専門選択を行う際にあらゆる視点が判断材料として強い影響力を示し，自己実現，情報，家族・親戚の

3つの動機の関連性は医療保育科生と保育科生では異なっている。(3)就業自己イメージは、独自性、自己高揚性、支配性、融和性の4つの因子において、医療保育科生は保育科生よりも強くイメージしている。競争性の因子については、保育科生の方が医療保育科生よりも強くイメージしている。(4)就業自己イメージと専門選択動機の関連性については、自己高揚性の因子は自己実現への達成動機と情報の取入れに影響を受けている。また、支配性の因子は情報の取入れのみに影響を受けている。

1) 進路希望についての違い

そもそも本学の医療保育科は、医療の専門的知識をもつ保育者の養成をその特徴として掲げ開設された。他の保育者養成校との大きな違いは、発達障害児実習と小児病棟実習がカリキュラムに含まれていることにある。したがって、障害児や病児への支援に関心を寄せている学生が入学を希望し進学したのだと思われる。医療保育科生、他の保育科生ともに、希望進路の割合が最も多いのはやはり保育所である。保育を専門とする養成校としては至極当然の結果である。そのような中で、他の保育者養成校では児童福祉施設への就職を希望する学生は6.7%である。その一方で、医療保育科では15.4%の学生が児童福祉施設への就職を希望しているというのは大きな特徴である。さらに、一般的には未だ知名度の低い医療機関で働く保育者を進路の視野に入れている点は、他の保育科生との大きな違いである。したがって、医療保育科生に上記のようなニーズがあるならば、他の保育科にはない独自の支援に力を入れていくことが必要であろう。

2) 専門選択の動機における違い

医療保育科生も保育科生も、専門選択の3つの因子すなわち自己実現、情報、家族・親戚においていずれを強い動機としたかという点には違いがなく、自己実現への達成が最も強い。この結果は、保育者が高校生にとって(特に女子学生)最も人気の高い職業であるからであろう⁸⁾。また、3つの因子の関連性における医療保育科生と保育科生での違いは、医療保育科が掲げる医療の専門的知識をもつ保育者という存在が、現在保育現場にはほとんど存在していないことに起因していると思われる。したがって、医療保育科生は情報を取り入れれば入れるほど、医療の専門的知識をもつ保育者の存在が必要とされていることや、やりがいがある仕事であるというイメージを強めるのであろう。このことは筆者らの先行研究³⁾と同様の結果を示すもの

であり、医療保育科の一期生と二期生において、専門選択を行う際に影響を受ける事柄は同様のものであったことが伺える。一方保育科生は、特に医療現場を意識しているわけではないので、自分の身近な存在である家族や親戚に保育を専門とする人がいることが情報の取り入れにつながったものと考えられる。

3) 就業自己イメージにおける違い

医療保育科生の特徴は、独自性、自己高揚性、融和性、支配性を高くイメージし、競争性を低くイメージすることにある。独自性は、他者を意識して独自の自分を示し、自己高揚性は、他者からほめられたり、尊敬されたりするなどして自己を高揚できる、融和性は、仕事上の人間関係が友人や仲間のように親密なものにできる可能性を示し、支配性は、他者への影響力の強さをその内容とし、競争性は仕事上の優劣の明確化や実力主義をその内容としている⁷⁾。この結果は、医療保育科生が自分たちは、保育士の中では特別な存在になれると考えているからではないだろうか。確かに、保育所や幼稚園において発達障害児への対応は苦慮されている事項であるし、入院児・病児・病後児への保育もニーズが高い。したがって、保育所や幼稚園に就職したとしても、他の保育者とは違うというイメージ、他の保育者が知らないことを知っており、影響力を示せる存在として、働く自分を想像しているのかもしれない。また、独自性をもつがゆえに、他の保育者との間には競争が生じないと考えているのかもしれない。

4) 専門選択の動機が就業自己イメージに及ぼす影響の違い

医療保育科生において、専門選択の動機における自己実現因子と情報因子が、他者からほめられたり、尊敬されたりするなどして自己を高揚⁷⁾できるという自己高揚性に影響していた。また、情報因子は他者への影響力の強さをその内容としている支配性⁷⁾にも影響していた。このことは専門選択時に得た情報によって、他の保育者よりも医療の知識という専門性をもつだろうと思っているため、職場でリーダーシップを発揮し、周囲から尊重される自己イメージを抱きやすいのだと考えられる。

以上を要約すると、医療保育科生と他の保育科生の間には違いがある。医療保育科生は付加価値を見出して入学してきているのだと思われる。見出された付加価値についてのイメージを独自性と認識しているのであろう。学生の抱いている就業自己イメージが、将来就業するだろう保育現場の現実 に即しているかどうか

は分からない。病棟で働く保育士はまだまだ数が少ない。病児保育では保護者は病気の子どもを預ける場所を求めているのであり、病児を対象にした保育を求めているわけではない可能性もある。保育所や幼稚園に就職した直後は、日々の保育を先輩保育者に教わることが多い中で、独自性を発揮することは難しいだろう。特に医療保育科生が自分たちの将来のイメージとして持っているだろう医療の専門的知識をもつ保育者(医療保育専門士：医療保育学会認定)は、資格化に向けて動き出したばかりであり、仕事の内容等すら定まっているとはいえない現状にあり、理想と現実のギャップは大きいだろうと思われる。したがって、実習は現実を垣間見る最初の機会として非常に有効であり重要である。就職後の離職等の問題を考えると、就職する前に就業自己イメージを現実に近づけておくことが養成校の教育として望まれるのではないだろうか。

5. 謝 辞

調査にご協力くださいました、畠山寛先生(鳥取短期大学)、富田昌平先生(中国学園大学)、中川美和先生(宇部フロンティア大学短期大学部)と各養成校の学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

6. 引用文献

- 1) 宗方比佐子：職業の選択(第1章)、「キャリア発達の心理学—仕事・組織・生涯発達」宗方比佐子・渡辺直登(編著)、東京：川島書店、pp. 13—29, 2002.
- 2) 榎本和生：大学等における就職・進学等への指導・援助、進路指導 71(10)：27—32, 1998.
- 3) 小河晶子・樟本千里・岡田恵子・鎌野智里：新入短大生の職業意識と専門選択の動機に関する研究—第一看護科、介護福祉科、医療保育科の比較を通して—、川崎医療短期大学紀要 25：51—56, 2005.
- 4) 松本真作, 木下 敏, 太田さつき, 安達智子, 音山若穂, 古屋 健：雇用管理業務支援のための尺度・チェックリストの開発—HRM (Human resource management) チェックリスト—, 調査研究報告書 No. 124：日本労働研究機構, 1999.
- 5) 木下 敏, 松本真作, 太田さつき, 古屋 健, 音山若穂, 田島博美, 住田修平, 田中健吾, 岡田知香, 浅井千秋, 町田秀樹, 中土井浩志, 伴英美子, 伊藤祐史：組織の診断と活性化のための基盤尺度の研究開発—HRM チェックリストの開発と利用・活用—, 調査研究報告書 No. 161：日本労働研究機構, 2003.
- 6) 清水 裕, 下斗 淳, 風間文明：大学生の就業自己イメージ尺度作成の試み, 社会心理学研究 20(3)：191—200, 2005.
- 7) 清水 裕, 下斗 淳, 風間文明：大学生の就業自己イメージの構造, 昭和女子大学生活心理研究所紀要 5：1—12, 2002.
- 8) 株式会社リクルート「キャリアガイダンス」編集部：キャリアガイダンス 第4章職業観, 「高校生と保護者の進路に関する意識調査」, 東京：株式会社リクルート, pp. 19—25, 2003.

1) 宗方比佐子：職業の選択(第1章)、「キャリア発達の心

